

政治文化としてのステレオタイプ：  
ガイアナにおける民族的住み分けの事例から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 栄人 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00008907">https://doi.org/10.14945/00008907</a>

# 政治文化としてのステレオタイプ

—ガイアナにおける民族的住み分けの事例から—

吉 田 栄 人

## 1. はじめに—ステレオタイプとリアリズム

ステレオタイプはいい意味でも悪い意味でも事実認識の可能性を狭め、時として誤まった解釈を導きだすことがあるという点において、人類学的記述の対極に位置するものとみなされ、おそらく人類学者がもっとも非難もしくは拒絶しようと試みる対象の一つである。もっとも、そういう人類学者たちも、自分たちが綿密な分析の末に得た科学的説明も一般の人々が気軽に使うステレオタイプと較べてさほど大差がないことに実は気がついているのかもしれない。実際問題として、通常のステレオタイプであれ人類学者による科学的な記述であれ、言及の対象となる人々の行動をある一定の枠内に固定してしまうという点では、それがもたらす実質的な効果に大きな違いはない。仮に人類学者の科学的分析が相対主義的な立場から客観的に行われたものであったとしても、対象となる人々ないしはその行為をディスコースという固定化された世界に封じ込め、読者ないしは聴衆との相互作用の場を奪い去っているという点では、ステレオタイプ使用者の自民族中心主義的な性向となんら変るところはない。むしろ、科学性を装って一般に大量に流布する可能性を有しているという点で民族誌的言説の方が厄介である可能性さえ存在する。

ステレオタイプが非難されるのは、それが往々にして使用者側の自民族中心主義的な認識に基づいた、事実に反する内容を含んでいるからである。だが一般に、描写される側が常に納得のゆく事実の描写などありえようか。また、描写される側が納得のゆく描写だけが事実であると言えようか。本来、記述ないしは描写が事実の完全な複写であることはできない。その意味で、すべての記述はなんらかの過ちなり意図的歪曲なりが混入したリアリズムである。その場合、ステレオタイプと呼ばれる一連の通俗性を帯びた非科学的な描写と、人類

学者が科学という方法論で武装して行なう客観的な描写との違いは、決して質的なものではなく、むしろそれを利用する上での目的意識の違いであると言える。ステレオタイプは、それが明らかに相手を直接誹謗するような攻撃的な形でない限り、その使用は制限されない。また、仮にそういった性格を帯びたものであったとしても、ステレオタイプの表現を向けられた対象が、その使用に抗議することが不利もしくは無駄な場合には、ステレオタイプは使用され続ける。ましてや、人々が個人の内心的なレベルでステレオタイプの事実認識を行なうことになんら障害があるわけではない。むしろ、ステレオタイプは複雑な人間関係を単純な構造に還元するという点において、人間の原初的な知的活動では積極的に利用されるはずである。

筆者が今までに調査の対象としてきたラテンアメリカ地域の中で、ガイアナ（旧英領ガイアナ）はステレオタイプが日常レベルでかなりあからさまに用いられている地域である。もちろん、他民族に対するステレオタイプはラテンアメリカのどんな社会にも存在したが、それは一般には使ってはならないタブー的なものとみなされていた。ところが、ガイアナでは仲間内で他民族の人々に言及する際には必ずと言っていいほどにステレオタイプ化された表現が付け加えられる。もっとも、それは筆者が調査した範囲内での見聞である。もしかしたら、ガイアナの調査以前に筆者はステレオタイプの使用は極力避けるべきものであるという先入観から、単にステレオタイプの使用に目をつぶっていただけなのかもしれない。ただ、ステレオタイプの使用が外来者に与えるインパクトの大きさから言うと、ガイアナの場合はやはり他国に較べてかなり大きいと言わざるを得ない。

こうしたステレオタイプの使用に対するガイアナの特殊事情は、おそらく単なるステレオタイプの語彙の発達やその使用頻度の差異に由来するのではなく、むしろステレオタイプの使用に対する社会的な意識、さらには社会構造の差異に根差すものであると思われる。なんとすれば、ラテンアメリカの少なくともスペイン語圏では支配・被支配の関係性を反映する民族的なステレオタイプの使用は、インディヘニスモの影響からかなり社会的に抑制されているのが現実である。あるいは実際に使用されたとしても、それは支配・被支配の関係性にかすめ取られていくだけで、結局は被支配者側の泣き寝入りもしくはあきらめという形での社会的沈黙と誤解が残るだけである。つまり、ステレオタイプは支配・被支配の関係性を隠蔽することに奉仕するがために、この関係性に異議を唱えようとしないう限り、ステレオタイプに対して人々は実質上「見猿聞か猿

言わ猿」を決め込むと言っても差し支えない。これに対してガイアナはインド系人とアフリカ系人がほぼ半数ずつを占め、勢力的に拮抗している。しかも、両者ともに海外からの移民（強制移住を含む）であるため、民族集団に特有の領土的主張という点では基本的には同条件にある。また、イギリスが宗主国だったガイアナでは、ブラジルやスペイン語圏ラテンアメリカ諸国の場合とは違って、独立後ほとんどの国家機構が被支配者であった人々の手に委譲されている。つまり、ガイアナで日常用いられているステレオタイプには、スペイン語圏ラテンアメリカ諸国の場合のような支配・被支配の関係性は希薄である。むしろ、ガイアナにおけるステレオタイプは、基本的には対等な関係にあるアフリカ系人とインド系人との間のライバル関係をあからさまに表現したものである。その他の民族に対してもやはり、類比的かつ権力のヒエラルキーとの関係性においてステレオタイプが使用される。つまりガイアナでは、ステレオタイプはある意味で国家の主導権争いの一つの変奏なのであり、それを用いることは何も規制されるべき性格のものではない。むしろ、それは国家の主導権争いという政治文化的な意味合いさえ持っている。

こういったステレオタイプの使用をまったく予想していない、しかもステレオタイプの使用は事実の認識を誤らせるものであり、その使用は極力回避すべきであると思込んでいる外来者にとって、ガイアナの人々がステレオタイプを頻繁に使用する様は大きな驚きである。だが、ガイアナにおけるステレオタイプは一つの政治的ディスコースであるとみなすことができるならば、そのステレオタイプが伝達するメッセージに必ずしも社会的事実を要求する必要はない。むしろ、社会的事実と異なるメッセージが含まれることで、ステレオタイプはどのような政治性を帯びるのかを知ることの方が重要である。あるいは、そのような政治性を帯びたステレオタイプはどのようにして発達してきたのか、またそのステレオタイプはその政治的な目的を達成する上でどれだけ効力を発揮しているのか、そういった点を明らかにした上で、我々はステレオタイプの使用に関する総合的な評価を下すべきである。

インド系人とアフリカ系人が国家を二分するガイアナでは両者の間に居住領域においてかなり明確な住み分けが観察されるが、ガイアナの人々がこの住み分けについて言及するとき、彼らはそれを自らの観察と経験に基づいた社会的事実の報告というよりは、民族的なステレオタイプを介在させた一つの社会的リアリズムとして語る傾向がある。つまり、住み分けは社会的な事実である以上に、彼らの取るべき行動に対する一つの参照枠を提供する社会的文化的な言

説をなしているのである。ある意味では、彼らは住み分け言説を用いるために住み分けを行なっているとさえ言える。そこで本稿では統計データを元に民族間の住み分けの実態と虚構性について報告し、その上で民族間の住み分けに対するインド系人の説明様式を分析することによって、ガイアナにおける民族的な言説が生成され消費されるメカニズムの一端を明らかにする。

## 2. 植民地期ガイアナにおける民族の住み分け

ガイアナにはイギリスの植民地支配の下でさとうきびプランテーションの労働力として様々な民族<sup>[1]</sup>が大規模に導入された。特に1834年の奴隷解放後は、アフリカ系人が抜けた後の労働力を補うために、また同時に労働賃金の上昇を抑えるためにポルトガル人、中国人、インド人が相次いで契約労働移民として導入されている。その結果、ガイアナは「6種類の民族」からなる多民族国家となった(表1参照)。これら諸民族のうちポルトガル人と中国人はプランテーション労働者としては定着せず、その導入も短命かつ小規模なものに終わって

表1 ガイアナの民族別人口の推移

	1891年	1911年	1921年	1931年	1941年	1960年	1970年	1980年
アフリカ系*	115,588	115,486	117,169	124,203	143,385	183,950	218,401	231,330
インド系	105,463	126,517	124,938	130,540	163,434	267,797	362,736	389,760
中国系	3,714	2,622	2,722	2,951	3,567	4,074	3,402	1,842
先住民	17,463	19,901	18,850	15,727	16,322	25,453	34,302	39,867
白人 <sup>b</sup>	4,558	3,937	3,291	2,127	2,480	3,217	2,186	770
混血	29,029	30,251	30,587	33,800	37,685	67,191	72,317	83,763
ポルトガル系 <sup>c</sup>	12,166	10,084	9,175	8,612	8,543	—	—	—
レバノン・シリア系	0	0	0	0	236	—	—	—
その他	0	0	0	0	0	8,415	5,998	3,266
申告なし	347	243	659	352	49	233	502	8,021
総計	288,328	309,041	307,391	318,312	375,701	560,330	699,844	758,619

a 1931年の国勢調査まではAfricanとBlackは別のカテゴリーとして扱われている。1941年の国勢調査でAfricanとBlackは区別なく全く同じ意味に用いられている。また、1960年の調査ではNegro、1970年以降はNegroないしはBlackとなっている。

b 1949年までの統計ではEuropean、それ以降はWhiteになる。

c 1960年の統計以後は「白人」としてカウントされている。

出典 *Report on the Results of the Census of the Population 1931.; West Indian Census 1946. Part D.; Population Census 1960. Vol.II. Part A.; 1970 Population Census of the Commonwealth Caribbean. Vol.7; 1980-1981 Population Census of the Commonwealth Caribbean.*より作成。

いる。一方、インドからの契約労働移民の導入は1918年まで続けられ、その数は200,000人に達し、以後ガイアナの人口構成の重要な一部を占めるようになっていく。これらの民族(人種)はイギリスのいわゆる分割統治政策もあって民族的に融合することはなく、むしろ、デスプレス(1969)の議論に従うならば、それぞれが置かれた異なる社会的経済的環境に選択的に適応した集団としてある程度の民族性を今日まで維持し続けることとなった。しかも、その各民族の異なる社会的経済的ニッチへの適応というプロセスは居住領域における民族間の住み分けという状況を引き起こした。特に、インド系人とアフリカ系人之间には今日でも混住や交婚を極力避けようとする社会的な意識が根強い(Despres 1964:1062-63; 柴田 1993; Williams 1991)。

独立以前の民族的な住み分けに関しては統計資料からかなり詳細に確認することができる。たとえば、デメララ川東海岸を首都ジョージタウン市から東に向かって行った場合、プランテーションと村落が交互に現われるが、各集落における民族構成はアフリカ系人(混血を含む)とインド系人の人口比だけで見た場合、1921年の統計ではインド系人1に対してアフリカ系人はオグル(0.2)、スパーレンダーム(11.2)、プレイザンス(3.0)、ラ・ボン・インテンション(0.1)、トライアンフ及びベターヴァーワグティン(1.3)、モン・リポー(0.1)、ルシグナン(0.2)、バクストン及びフレンドシップ(5.5)、ノン・パレイル(0.2)、バッチャラーズ・アドヴェンチャー(2.4)、アンモア(0.4)、ハスリントン、ナバクリス、ゴールデン・グローブ(3.7)、コーヴ及びジョン(1.1)、ヴィクトリア(6.6)である。すなわち、我々はプランテーション労働者としてのインド系人コミュニティと、自由民としてのアフリカ系人が主として居住する村落とを交互に通過することになる<sup>9)</sup>。そして一般に、都市部から離れば離れるほど、このアフリカ系人とインド系人の人口比のギャップは大きくなり、またインド系人が数の上で優勢になっていく傾向にある。

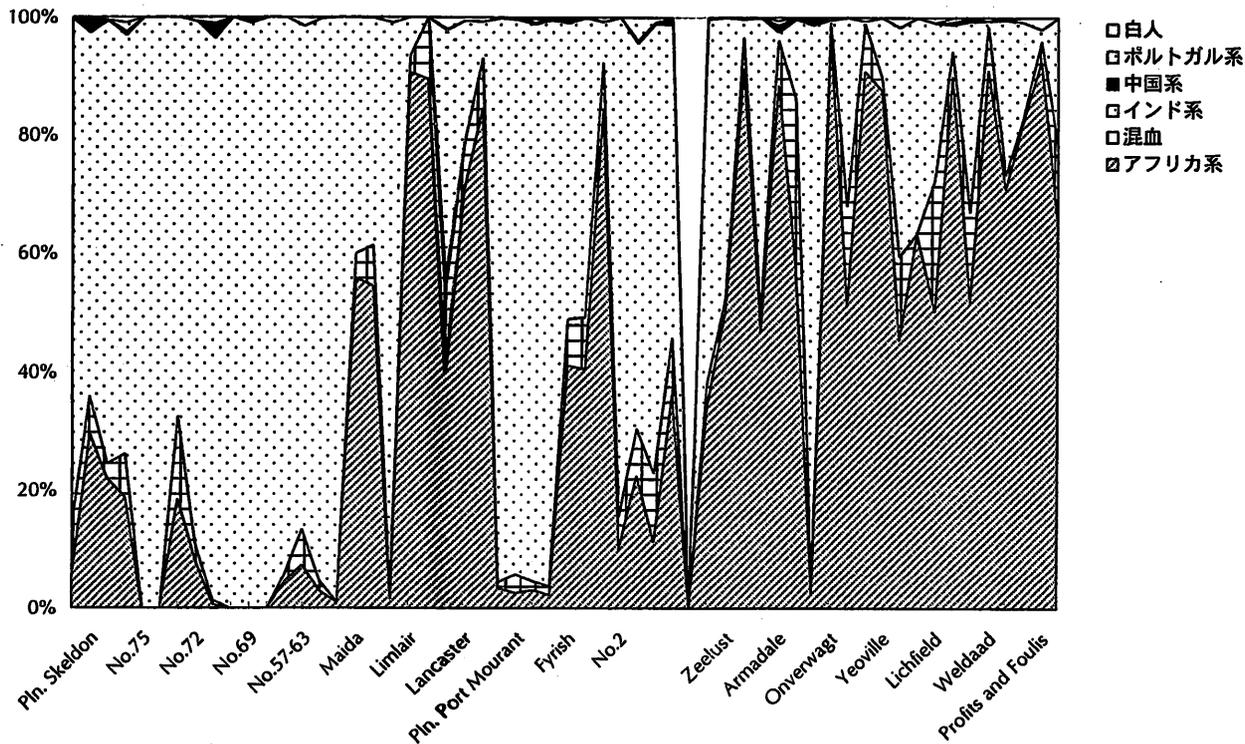
1931年のセンサスによると首都ジョージタウンがあるデメララ州(county)を中心とする都市部ではアフリカ系の人口比が高い<sup>10)</sup>。特に、ニュー・アムステルダム、バービス川西岸、ジョージタウンでは人口1,000人に対するアフリカ系の人口はそれぞれ609人、539人、535人となっている。これに対してバービス州やエセキボなどの周辺州ではインド系人の人口比が高く、コレンティン地区、バービス川東岸地区、デメララ西岸地区、レグアン島、ワケナアン島では、インド系人は人口1,000人に対してそれぞれ721人、713人、695人、675人、618人を占めている。逆に、バービス川上流地区、ポメルーン・モルカ・北西

地区、及びジョージタウン市ではそれぞれ10人、69人、89人と極端に少ない。また、アフリカ系人とインド系人だけに限って言えば、その人口比はジョージタウン、ニュー・アムステルダムでそれぞれ約6対1、4.3対1であるのに対して、バービス州東部海岸、コレンティン海岸、コレンティン川両岸ではアフリカ系1人に対してインド系人はそれぞれ約4.1人、3.1人、15.8人という高い比率を示している。

しかし、農村部におけるアフリカ系人の人口数は減少しても、アフリカ系人とインド系人との間の住み分けが解消するわけではない。グラフ1はガイアナ東部のバービス河流域およびコレンティン海岸地域における民族構成を表わしたものであるが、コレンティン海岸沿いのランカスター村、マンチェスター村、リヴァプール村、リムレール村、ナーニー村、キルドナン村などのアフリカ系人集落がインド系人地区の中に飛び地のような形で存在する状況が確認できる。また、統計を取る単位を村から地区にまで引き下げていった場合、住み分けは必ずしも都市部と農村部の地域差だけに比例するものではないことが1921年の統計(グラフ2)と1960年の統計(グラフ3)との比較から確認できる<sup>④</sup>。さらには、都市部においてもある民族だけが固まって住むような民族街はいくつも存在した。たとえば、ジョージタウンではレイシータウンおよびブルダのアレクザンダー通りはインド系人街、チャールズタウンのロンバート通りは中国人街、キングストン、カミングバーク、ブリックダムは白人の居住地区であった(B.L. Moore 1987:213)。

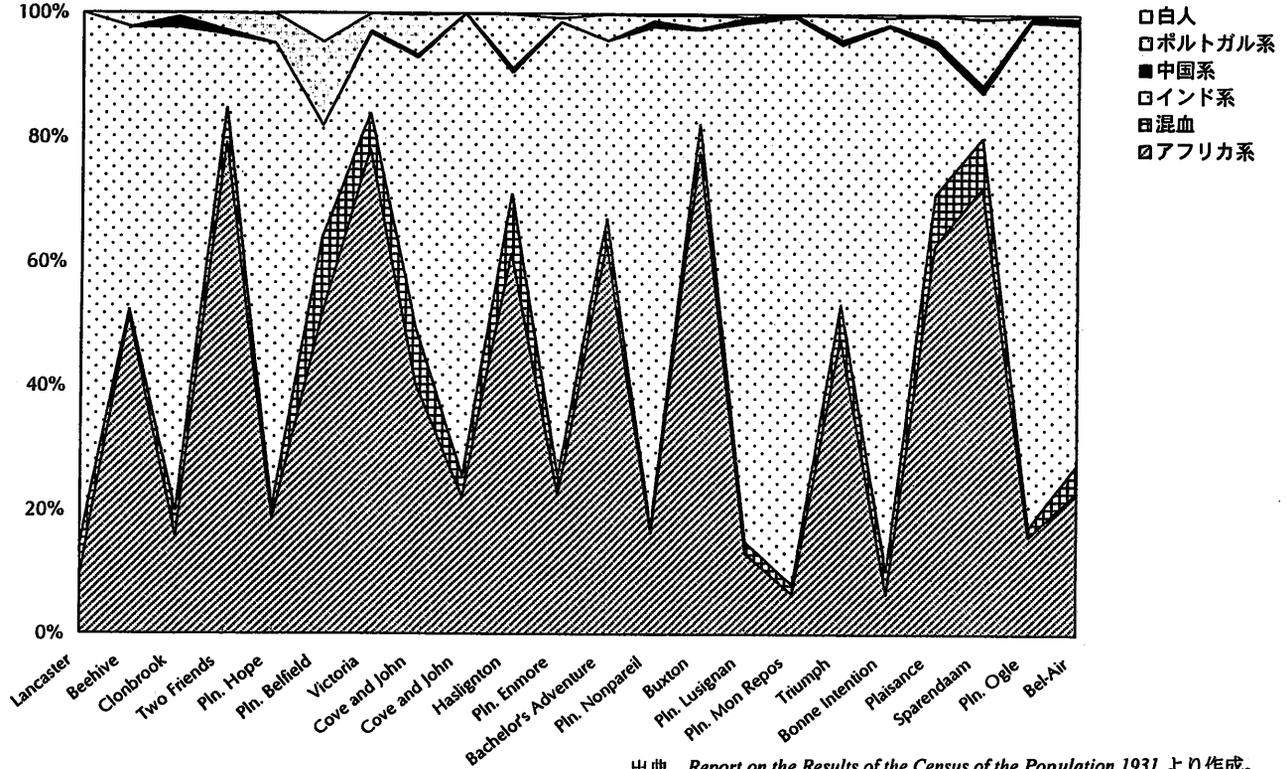
こうした民族間の住み分けは社会的経済的資源の利用に起因する民族集団間での異なる社会的文化的ニッチへの適応とみなすことができる(Despres 1969)<sup>⑤</sup>。つまり、民族の地理的な配置はかなりの程度で各民族の経済活動に一致しているのである(Moore 1987:214)。たとえば、インド系人の農業部門への就業率は1932年の統計によるとインド系人就業人口(65,183人)の実に80%を占めているのに対し、公共部門に就労する者はわずかに241人である。また教師や医者、弁護士、牧師などの資格を必要とする知的職業従事者も505人しかいない。他民族との比較で言えば、たとえば小学校のインド系人教師が全教師に占める割合は7.2%でしかなかった(Baksh 1979:13)。インド系人の社会進出が飛躍的に高まる1940年以降、教育職に占めるインド系人スタッフの比率は次第に高まっていくが(1965年には54%)、少なくとも1931年以前は教育職は混血及びアフリカ系人がほぼ独占する職業の一つとなっていた<sup>⑥</sup>。こうした民族の就業形態が結果として、アフリカ系人は自由村および都市部、インド系

グラフ1 バービス、コレンティン海岸民族構成(1921年)



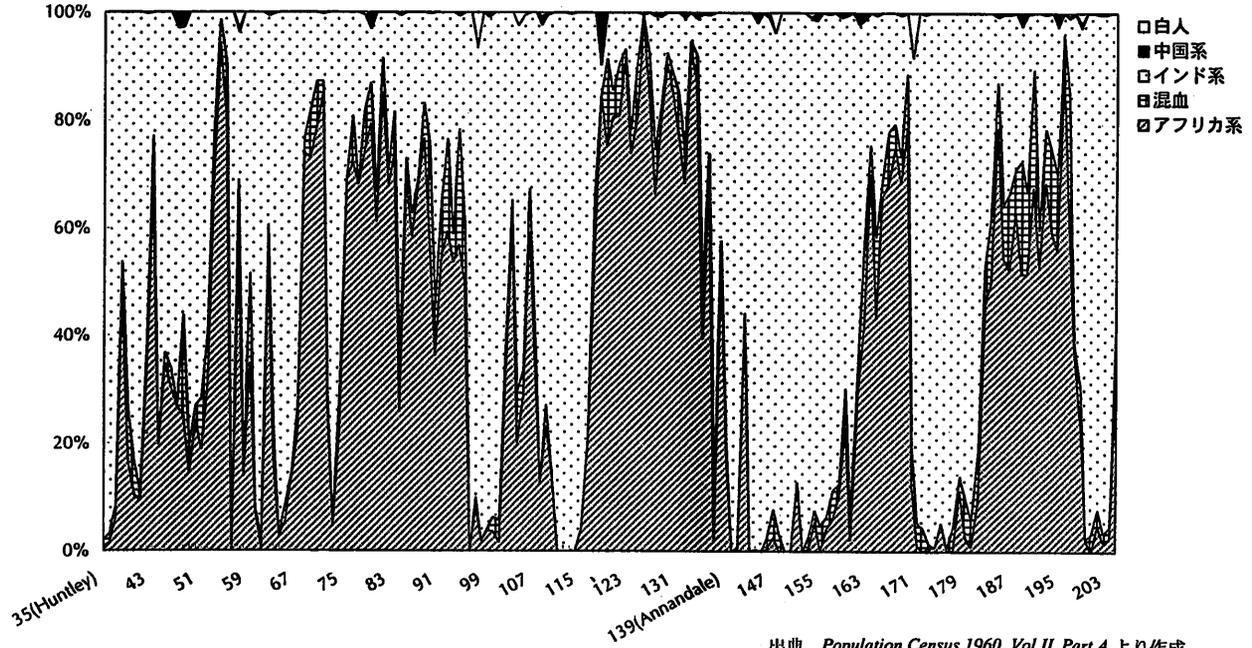
出典 Report on the Results of the Census of the Population 1931.より作成。

グラフ2 デメララ東海岸民族構成(1921年)



出典 Report on the Results of the Census of the Population 1931.より作成。

グラフ3 デメララ東海岸民族構成(1960年)



人はプランテーションという民族の地理的な分散となって現われるのである。実際、1932年の統計によると、都市部に住むアフリカ系人はインド系人の約4.5倍(41,607人vs.9,302人)であるのに対し、プランテーションではその約5分の1(12,306人vs.61,037人)に過ぎない。しかも、プランテーションの人口はアフリカ系人とインド系人だけを見た場合、都市部の約1.5倍(73,343人vs.50,909人)である。バービス州だけに限定すればその比率はアフリカ系人1(2,012人)に対してインド系人10(20,180人)という数字になる。

以上のように、統計データから独立以前のガイアナにおける民族の住み分け状況がある程度確認することができる。また、それらの統計データから民族的な住み分けが行われるに至った原因の一端を伺い知ることもできる。民族集団の居住領域と経済活動の領域とがかなりの程度で重なっているという事実は、明らかにさとうきびプランテーションを中心とする植民地経済システム、特に契約労働という社会経済制度の下で各民族がそれぞれに異なる経済活動の領域を選択し、経済活動上お互いに競合しないような形で植民地体制に組み込まれていったことを示している<sup>9)</sup>。

ただ残念ながら、こうした統計データは社会的な現実の一側面を表わすものでしかない。そこから、住み分けを行なう人々の意識あるいは人々が住み分けを行なう場合の論理を推し量ることはできても、住み分けを行わない人あるいは望まない人たちの意識ないし主張は見えてこない。住み分けは人々の一貫した行動と社会の構造的な要因によって作り出されたものであって人々の意識および行動の多様性は本来無視可能であるか折り込み済みであるとする主張には一定の留保が必要であろう。すなわち、植民地時代のガイアナでも予想されるほどに社会的な移動は不可能ではなかった。教育を受け、技術を身に付け、また運と能力さえ持ち合せていれば民族の出自に関係なく誰でも、白人が独占する植民地の支配機構を除くほとんどの職業につくことができた。ムーアは被支配者間の職業的な住み分けは19世紀の終わり頃から次第にはっきりしたものはなくなっていくと見ている(Moore 1987:214)。

また、植民地支配は結果的には人々の欲求を過度に裏切ることなく、資源を案配よく分配するシステムであった。もちろん、植民地当局が資源の獲得をめぐる諸民族間の葛藤を常に監視し、植民地当局の都合および強制力によって資源の配分を決定してきたという側面は否定できない。その意味では、諸民族が自ら望んで住み分けを指向してきたわけではない。むしろ、支配者の利益にとって平和共存的であるように「分割」統治されていたに過ぎない。ところが、ガ

イアナは宗主国イギリスから独立することによって、そういった民族間の調整機構を決定的に失ってしまうことになる。独立期におけるアフリカ系人とインド系人との間の政治紛争を境にして両者の間には独立以前にも増してはっきりとした住み分けが行なわれるようになっていくのである<sup>9)</sup>。

### 3. 独立後の住み分け

1950年代後半から60年代前半にかけて、独立後の政治的覇権を睨んだ政権抗争が人民進歩党 (People's Progressive Party、以下PPPと略す) と人民国民議会 (People's National Congress、以下PNCと略す) との間で起こる。この政権抗争は各政党がそれぞれインド系人とアフリカ系人を支持基盤としていくことによって、次第に民族紛争の様相を呈して行った<sup>10)</sup>。この民族紛争によって、アフリカ系人地区に住むインド系人はインド系人地区に移住するか、空き地などに新たな居住地を求めねばならなかった。また、逆にインド系人地区に住むアフリカ系人もアフリカ系人地区等に避難しなければならなかった。たとえば、バクストン、プレイザンス、ビー・ハイヴ、アンス・グローヴ、ゴールドデン・グローヴ、パッチェラーズ・アドヴェンチャーなどに居住していたインド系人はインド系人の人口比の高かったルシグナンやモントローズ等の村へ避難した<sup>11)</sup>(cf. Williams 1991:46)。チュディ・ジェイガンの試算によると、アフリカ系人、インド系人合せておよそ2,668家族 (15,000人) が住居の移転を余儀なくされている。また、死者および負傷者はそれぞれ176人、920人を数え、1,400軒以上の家が焼き討ちにあっている (Jagan 1972:311)。

この一連の民族衝突の中でも、1964年5月24日にボーキサイト鉱山の町マッケンジー (現在のリンデン) のウイスマール地区で起きたアフリカ系人によるインド系人虐殺は、アフリカ系人が圧倒的に優位な立場にあることを証明し、かつその後も両者の民族衝突に対する、特にインド系人との判断を決定的なものにすることになった。このマッケンジーにおけるインド人虐殺事件は、今日のインド系人とアフリカ系人の民族的対立を語る際に、特にインド系人の側から必ず登場するエピソードであり、ガイアナにおける今日の民族対立をある意味で神話化している事件であると言ってもよい。

1960年代にこのような民族衝突が起こったことに対する解釈ないしはその歴史的認識はなんであれ、この一連の事件を境としてインド系人とアフリカ系人が決定的に住み分けを余儀なくされたことは事実である。少なくとも、60年代の民族衝突の後、両者は不必要に接触することを避けるようになった (Roback

1968:61)。この場合の住み分けは、ただ単に居住地を水路で囲まれた安全な領域へ待避することを意味するに止まらず、日常生活における行動領域の限定さらには経済活動の分離をも引き起こしている（後述するモン・リポー市場など）。

民族紛争が収束してから30年が経過した今日、アフリカ系人とインド系人との間にあからさまな敵対関係は見られない。しかし、両者の間に住み分け関係が存在することはガイアナの全ての人々が認めるところである。ところが残念ながら、この独立期の民族紛争によって実際にガイアナ全体でどれだけの人口の移動があったのか、またそれによる民族の集住化が民族紛争の終結後もどれだけ継続したのかを正確に伝える公式の統計データは存在しない。我々はその変化を断片的なデータと人々の証言から伺い知ることができるだけである。そこで、本節では筆者が1992年の調査で行なったインド系人へのインタビューと人口移動に関するある一つの統計データを元に、独立後のガイアナでは民族関係はどのように変化したかについて考えてみることにしよう。

筆者は1992年に行なった調査ではインド系人のエスニシティを考察する手がかりとして民族的な住み分け状況を把握しようとしていたため、インド系人集落を中心に調査を行なった。本節ではその調査の中からデメララ東部海岸地区のアナンデル村とジョージタウン市内の高級住宅街であるベル・エア・ガーデン地区を取り上げる。

### 3.1 アナンデル村

アナンデル村は水路を挟んでその東側をアフリカ系人が大多数を占めるバクストンと、また西側をインド系人集落であるルシグナンと接している。1960年の地図には幹線道路の南側に小規模な集落が見えるだけであるが、現在は鉄道の線路（撤去されているため現在は存在しない）から防波堤までびっしりと家が建ち並んでいる。アナンデル南部はもともとハウジング・スキームによって整地された居住区であるため、路地が碁盤の目状に走り、各家の敷地もほぼ均等である。一区画には基本的に路地に面して五戸の家が配置されている。現在の居住者状況は、筆者が確認し得た限りでは、インド系人の村であると言われる割にはアフリカ系人がかなり含まれていた。特に、幹線道路から南端に向かって行けば行くほど非インド系人の占める割合が高くなっている。一方、アナンデル北部に関しては住民の証言による限り、住民のほとんどがインド系人である。

60年代の民族紛争期間中には、アナンデル村でもやはり民族衝突による民

族の移動が行われているし、また今日のアナンデル村の民族構成は60年代の民族紛争およびそれによる住み分けを今だに継承している。聞き取り調査によると、バクストン等から多くのインド系人が避難してくる代わりにアナンデルに住んでいたアフリカ系人がバクストン等に逃れて行ったという。つまり、一時期ながらアナンデルは100%インド系人の村であったことがある。また、アナンデル北部は60年当時もともと空き地であったところに、民族紛争を逃れてきたインド系人たちが住居を新しく構えた居住地であり、今日その住民のほとんどがインド系人であることは当然である。ところが南部地区に関しては、多少事情が複雑である。

現在、アナンデル南部には民族紛争以前に住んでいたアフリカ系人と最近になって初めて移ってきたアフリカ系人が住んでいる。前者は民族紛争が一応収束したことを見計らって、自分の本来の所有地に戻ってきた人々である。民族紛争で避難した人々は、一般に避難者同士（インド系人とアフリカ系人）で土地や家屋を交換したり、結局は売り払う場合が多かったという。ところが、中にはこのように元の家に戻るケースも結構存在する(cf. Williams 1991:46)。現在アナンデル村にアフリカ系人が住んでいることに対して、アナンデル村のインド系人たちは必ずしもあからさまな拒絶の態度は取っていない。アフリカ系人の全てが民族紛争以前からインド系人たちと親しくしていた人々であったり、あるいは新参者であっても十分信用に足りる人物であるならば、アフリカ系人がアナンデル村に住むことに対して特に反対する理由はないはずである。実際、民族紛争期間中においてさえ、かばったり、かくまったりしてくれる友人が対立する側の民族の中にいたおかげでそのまま住み続けることができた人々もわずかながら存在した(cf. Williams 1991:46)。ところが、現在アナンデル村に住むアフリカ系人に対するインド系人の感情は必ずしも好意的なものではない。

アナンデル村南部への出入口は基本的には幹線道路につながる道一本と東西の水路にそれぞれ一本ずつ架けられた小さな木の橋だけである。このように出入口が極めて限定されているため、泥棒などが侵入した場合にはすぐに出口を封鎖して文字どおり輩を袋叩きにすることができる<sup>104</sup>。ところが、実際にはこれは頭隠して尻隠さずの状態に過ぎない。特に、南端の後背地からの進入に対しては全く無防備である。アフリカ系人が南端に集中しているのも、実はこの後背地からの進入を受けたためなのである。ただ、そこが地理的構造上外部からの進入に弱い部分であったとしても、住んでいるインド系人を実力で追い

出してまで、アフリカ系人がそこを占拠することはできなかったはずである。むしろ、彼らはインド系人住民がよそに移住した（そのほとんどは国外にいる）ために空き家と化した場所を占拠している。こうしたアフリカ系人による占拠をインド系人たちは次のように説明する。アフリカ系人たちは裏の藪からいつの間にかやって来た。しかも、この不法侵入者たちを立ち退かせる手段はなかった。一旦追い出しても、彼らはすぐに戻ってきた。その上、警察に連絡しても、警察自体がアフリカ系人の集団であるため、結局はうやむやにされてしまった。こうしてアフリカ系人の不法占拠は既成事実化したのだ。

しかし、こうしたディスコースは歴史的事実に対する説明であると同時に、社会的現実に対するインド系人の解釈ないしは内的心情の吐露に近いものでもある。アナンデル村に住むアフリカ系人に対するインド系人の解説は、アフリカ系人の進入を実力で阻止することができなかったことへの苛立ちもしくは告発の様相を呈しながらも、インド系人たちはそれをあからさまな拒否的態度として表わすことができない。こうした状況は決してアナンデル村に限定されたことではないし、様々な状況において繰り返される構造的な社会関係ですらある。その限りにおいてアナンデルにおける居住空間の確保の問題は、アフリカ系人に対する拒否的感情を社会的に抑圧させるがゆえに、インド系人の心理においてアフリカ系人に対する嫌悪と敵愾心が増幅されていく様子を示している。

### 3.2 ベル・エア・ガーデン地区

ジョージタウン市の現在の高級住宅街は主に北東部の海岸線に位置している。その中でも、プラシャド・ナガールと植物園に隣接するベル・エア・ガーデンはインド系人住民の比率が非常に高い地区である。プラシャド・ナガールはもともとインド系人住民の多い地域であるが、ベル・エア・ガーデン地区は1960年当時は白人の居住区であった。今日このベル・エア・ガーデン地区にインド系人が多く居住しているのは、ガイアナが英国から独立し社会主義路線をとっていく過程でベル・エア・ガーデン地区に居住していた白人たちが国外へ脱出していった際、経済力のあるインド系人たちがこの高級住宅地の家屋を買い取ったためである。こうした歴史的経済的な背景はあるにせよ、ベル・エア・ガーデン地区は民族的な住み分けの一つのケースとみなされている。実際、ベル・エア・ガーデンにインド系人が多いことを筆者に教えてくれたのは、インド系人の調査助手であった。彼によると、多くのインド系人はベル・エア・ガーデ

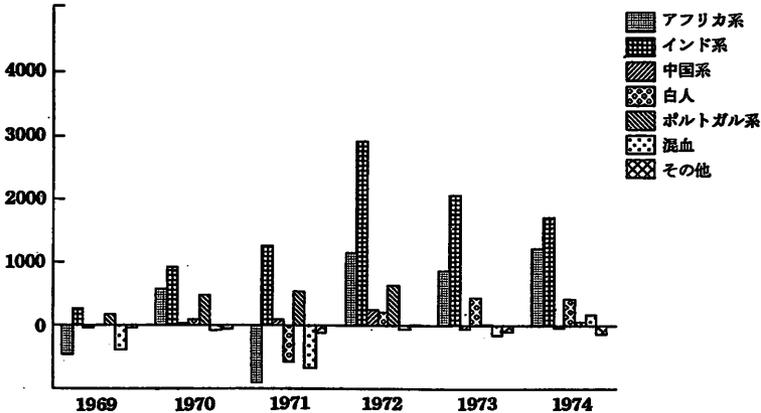
ン地区をインド系人の居住区とみなしているのだという。

しかし、この地域をその他の地域の住み分けと同列に扱うにはあまりに不確定要素が多いことも事実である。まず、エリート階級の人々に民族的な住み分けがどれだけ必要かという問題がある。生活がある程度保証された人々に住み分けといった生活戦略は果たして有効かつ必要だろうか。むしろ、エリート階級のハイライフにおいてはその高度な政治性ゆえに、あからさまな差別行為は隠蔽されがちであろう。少なくとも、PNC政権に徴用されたインド系人エリートたちが民族性を前面に押し出すような住み分け行為を取ることは自らの社会的な地位を危うくすることにも繋がるはずである<sup>[10]</sup>。また、仮に民族的な住み分けを意図したものだとした場合、なぜ他の地域ではなくベル・エア・ガーデンでなければならないのかという問題がある。ベル・エア・ガーデンに住居を購入したインド系人たちは自身は、民族的な住み分けを行っているという意識はあまりなかったのではないだろうか。むしろ、彼らは社会的なステータスを示すことができる場所としてベル・エア・ガーデンが最も相応しかったためそこを選択した可能性を否定することはできない。こうした不確定要素にもかかわらず、ジョージタウンの人々、特にインド系人たちはベル・エア・ガーデンをインド系人が多く住む地域として、つまり住み分けの一つの事例とみなしているのである<sup>[11]</sup>。

アナンデル村を始めとする多くのインド系人居住区はアフリカ系人との直接的接触を回避することを主たる目的としている。少なくとも、居住空間の分離を意図している。しかし、住み分けという行為は、経済的な分業などをも含むものであり、単に居住空間の分離だけに止まらない。そうした観点から捉えた場合、植民地経済機構の下では可能性そのものが限定されていた住み分けは、独立後の社会においては様々な形態を取り得る。資源の配分においてアフリカ系人が国家機構を独占していく中で、農業を除けば民間の商業活動だけがインド系人に残された経済活動の場であった。ベル・エア・ガーデン地区が高級住宅街でありうるのはそこに立ち並ぶ家屋が「高級」であるのと同時に、あるいはそれ以上にそこは経済的社会的成功者が住む場所であると人々がみなしているためである。そこに住むことはインド系人に許された経済活動の中で成功すること、すなわち最適地に到達することであり、外部に住むインド系人にとっての理想を表わす。その意味においてベル・エア・ガーデンはインド系人にとっての住み分けの事例でなければならないのだと言えよう。

また、独立によって人々にはガイアナ国籍をもって外国に生活の場を求める

グラフ4 海外流出者総数



出典 Guyana International Migrant Report 1969-71, 1972-74. より作成。

という可能性が開かれた。グラフ4は、1969年から1974年までの出入国管理記録から海外流出者数を割り出し、民族別にグラフ化したものである。白人の他に、多くのポルトガル系人、中国系人、インド系人、そしてアフリカ系人までもが米国やカナダ、英国、トリニダード・トバゴなどへ移住もしくは一時的に滞在している。この国外脱出は民族的な区別の関係なくすべての個々人に生活改善のためのニッチを提供するものであったはずである。だが、ガイアナ国内において経済活動を限定されてしまったインド系人にとって、国外脱出は民族的な住み分けの一つの選択肢として写ったはずである。もっとも、そうした解釈にはある種の論理的な飛躍が必要である。国外へ脱出することの理由として、多くのインド系人はPNC政権のアフリカ系人優遇政策を上げる。そして、PPPが政権を取ったら多くの国外在住インド系人が帰国してくるはずだと言う。だが現実にはその優遇政策の対象であるアフリカ系人でさえ、国外に職を求めねばならないのが現状である。それに加えてインド系人の流出者数がアフリカ系人のそれを上回っていることは、必ずしもインド系人の国外脱出が両民族間の対立に由来する住み分けがあったことを意味しない。それは自らの経済的利益あるいは生活の改善のためには可能性のより高い海外に活動ないしは生活の場を見出そうとする損得勘定においてインド系人がアフリカ系人よりも秀でていただけだとみなすことも可能なのである。

こうしたアナンデル村やベル・エア・ガーデン地区の例に示されるように、

ガイアナにおける民族間の住み分けは社会的な事実である以上に、一つの社会的リアリズムとして語られる傾向にある。人々は民族的な住み分けを既成事実化することによって全ての行為の原因を民族関係に求めようとする思考様式に完全に慣れ切っている。インド系人が国外への脱出を60年代以降の民族的な住み分けの一つのオプションとみなしてきたのだとすれば、それは個人的な行為としての国外脱出を民族的な対立によって社会的にカムフラージュするためである。あるいは、一般の社会生活のレベルにおける民族的な対立（あるいは民族的な言説）を政治的に演出するために、国内に残った人々が利用してきたのだと言えよう。

結局、我々がこうした住み分けに関する社会的現実の解釈に当たって行わなければならないのは、参照枠としての社会的現実（それはたとえば出入国管理記録に現われるようなものであるが、ガイアナの人々は統計によってそれを提示されなくとも、自らの経験によって情報として内化しているはずである）がどれだけの真実性を含んでいるのか、あるいは逆にそれがどれだけ偏見に満ちたものであるのかを明らかにすることではなく、むしろそれらの社会的事実に関する情報ないしは言説が用いられる形態、すなわちそれらはどのようにして住み分けと関連づけられるのか、またそれはなぜ関連づけられるのかを明らかにすることであると言えよう。その意味において、アナンデルとベル・エア・ガーデンはガイアナにおける住み分けを理解する上で重要な手がかりを提供している。

#### 4. 住み分けと民族的ステレオタイプ

インド系人とアフリカ系人との間で住み分けが行われていることに対してその理由を尋ねた場合、インド系人のほとんどは安全性を主な理由として上げる。すなわち、「アフリカ系人は力に任せて弱い者いじめをする (bully) 野蛮な連中であり、体力的に劣るインド系人は常にカモにされる」、また「アフリカ系人地区は犯罪が多く危険である。その点、インド系人地区に住んでいれば安全である」と言う。その根拠として自分が経験したあるいは知り合いが経験した次のような例が付け加えられる。インド系人女性の多くは街中でアフリカ系人の泥棒にものをひったくられた経験が少なくとも一度はある。また、アフリカ系人との間にいざこざが起きた場合、理由は何であれ、結局はアフリカ系人の暴力とアフリカ系人警察の意図的無介入の前にインド系人に勝算はほとんどない。

前章で取り上げたアナンデル村南部の空き家の占拠はこういったアフリカ系人の傍若無人さを語ろうとする一つの典型的な例である。また、調査期間中に筆者が入手したエピソードとしては、ある火事場泥棒事件がある。ある昼下がり筆者がベター・ホープというインド系人の村を訪れた時、家の焼け跡の傍らの木陰に数名のインド系人の男たちが寝そべっていた。彼らとの会話中、インド系人とアフリカ系人との関係に話しが及ぶと、彼らのうちの一人が後ろの焼け跡を指さしながら、火事場泥棒の顛末を話し始めた。手が付けられなくなった火の手から少しでも財産を守ろうと、家の住人が家具類を路地に運び出していると、いつの間にかやって来た数名のアフリカ系人たちがそこに置いてあった家具類を持ち去ったと言うのである。なぜ誰も止めないのだと筆者が尋ねると、「不可能だね。アフリカ系人のやることを止めることは（我々インド系人には）誰にもできやしない。後で何をされるか分ったもんじゃない。それにすぐ警察に連絡したけど、数時間も経ってからやって来て現場検証をただけで帰って行った。それっきりさ。」という返事だった。

しかし、一方でこうしたインド系人たちの説明の多くがまた聞きの間接的な情報に基づくものであったり、またアフリカ系人地区は危険だから、あるいはそう言うふうにいるから極力近寄らないようにしているといった具合に、アフリカ系人との接触は危険であるとの単なる思い込み過ぎない部分もあることも事実である。そこにはなんらかの民族的なバイアスを通した事実の歪曲や変形の操作が加えられているはずである。だが、だからと言って、我々はインド系人の、あるいはアフリカ系人の同種の言説をすべからず事実と反するものとして無視するわけにはいかない<sup>[4]</sup>。むしろ我々は、なぜそのような言説が用いられるのか、その理由を明らかにしなければならない。

アフリカ系人に対して向けられるステレオタイプ化したこうしたインド系人の不信感を決して常に一樣であるわけではない。むしろ、それはアフリカ系人に対する評価が求められるコンテクストおよび評価者の社会的背景によって多様に変化するのが現実である。特に、評価者が日常生活においてアフリカ系人とどれだけ接触する機会があるかによってその評価の内容は大きく異なってくる。たとえば、住民のほとんどがインド系人であるトライアンフ村東部では、60年代の民族紛争の記憶が生々しく語り継がれており、アフリカ系人を一般に危険視する態度が、特に外部社会に出ることの少ない女性の間に見られる。彼女らは買物をするにしても、同じ村の中にあるがアフリカ系人が多く住むトライアンフ村西部の公設市場には行かず、60年代の民族紛争期間中にインド系人

のために開かれ現在も続いているモン・リポーの土曜市にわざわざ買出しに出かけるのだと言う<sup>10</sup>。また、筆者が調査を行なった1992年7月は、大統領選挙が間近かに迫っており、選挙の結果次第ではまた黒人が襲ってくるのではないかと危惧する女性も多かった。

一方で、このようにインド系人の女性がアフリカ系人との接触を極力避けようとするのに対して、男性の方では仕事の関係もあってか、アフリカ系人との友好的な付き合いが行われている場合も少なくない。実際、トライアンフ東部のある女性は、自分はトライアンフ西部には絶対に出かけないが、夫は西部にアフリカ系人の友達が何人かいる様子で、しばしば出かけて行くが特別問題はないようだ、と筆者に語った。また、大統領選挙に関する多くのインド系人男性の意見は、アフリカ系人が負けた場合の報復に関するものというよりは、選挙で負けないようにするためにアフリカ系人が如何に不正を行なうか、あるいは選挙が公正に行なわれた場合に結果はどうあるべきかに向けられる傾向があった。その場合、彼らはアフリカ系人に対して恐怖心を抱いているというよりは、むしろアフリカ系人を野蛮な人たちとして軽蔑の対象にしていた。

以上の意見分布は主としてインド系人地区に住む人々の場合であり、非インド系人地区に住むインド系人のアフリカ系人観は多少異なった様相を呈する。トライアンフ西部に住むインド系人たちのアフリカ系人観は、上に述べた東部のインド系人のそれとは明らかに異なっている。インド系人とアフリカ系人は地域的な住み分けをする傾向にあるようだがどう思うかという筆者の問い掛けに対して、彼らは基本的にはアフリカ系人と軒を列ねて暮していることに特別不安観を感じないと言う。ただ、表向きは友好的に振る舞っているけれども、本音の所ではアフリカ系人の行動様式を軽蔑している者は少なくない。当然、彼らのアフリカ系人観はそれを表明する相手とシチュエーションによって変化する。いずれにせよ、アフリカ系人地区に住むインド系人たちのアフリカ系人観は、日常生活の中での個人的な葛藤のひとつの表現であって、アフリカ系人との宿命とも言える葛藤の中に自らの生活の場を構築しようとするインド系人地区の人々のアフリカ系人観とは基本的に異なるものであると言える。

インド系人の職業別のアフリカ系人観に至ってはおそらくさらに多様であろう。また、それは状況に応じた使い分けがさらに明確になされているはずである。しかし、どのような場合にそれらの使い分けが行なわれるかについてはいまだ未調査であり、今後の研究課題である。ただここでは、インド系人がアフリカ系人に対する否定的な評価を行なう場合、それは常に一定のパターンに従っ

ていることに注目しておきたい。すなわち、インド系人がアフリカ系人の評価を行なう場合、あるいはその逆の場合でも、それは個人的な評価である以前に、またそれ以上に、ステレオタイプ化された民族的な評価の形を取る傾向が見られる。

ブラケット・ウィリアムズ(1991)はこうしたガイアナの人々の人物評価のあり方を「血に流れる葛藤、名に残る傷」という言葉で表現している。彼女によるとガイアナの人々は、いかなる人も強弱の違いこそあれ、必ずいずれかの民族の「血」を持っているのであり、それから逃れることはできないと信じていると言う。それは、ただ単に各個人が自己実現において常に自らの出自と闘わねばならないだけでなく、ガイアナの社会関係そのものがステレオタイプのな性格を強く帯びたこの民族的な「血」によって構成され、また規定されていることを意味している。そのような民族の「血」は、おそらく人々にとってガイアナにおける社会生活を理解し、それを自らのものとして引き受けて行く上で重要な枠組みを提供している。その意味で、たとえばインド系人がある一定のアフリカ系人像を共有し、すべての個人評価をそこに還元していくことはガイアナ的な社会生活の基本的なあり方であると言える。

では、住み分けという事態はこのステレオタイプの使用とどのような関係にあるのであろうか。ここで、我々は次の事実に注目すべきであろう。すなわち、世界中の多くの民族紛争がしばしばゲリラ的な徹底交戦にまで発展しているにもかかわらず、ガイアナの民族紛争がそのような展開を全く見せていないこと。それどころか、ガイアナの人々、特にインド系人たちは一般に、上に述べてきたように住み分けという形で民族紛争を極力回避しようとしている。たとえば、インド系人がしばしば持ち出すような身体上の優劣の差は、通常武力的な民族衝突を避けるための理由にはなりえない。むしろ、それは住み分けを正当化するための原理の一部を構成するものであると考えられる。つまり、インド系人たちのアフリカ系人に対するステレオタイプのな潜在的恐怖感<sup>10)</sup>は、自らの意思決定を民族的な言説によって自己正当化する一種のカムフラージュである。ただし、そういったステレオタイプが紛争を回避するための民族的な知恵として発達したとみなすことは、住み分けの本質を見誤ることになるだろう。我々はむしろ、故チェディ・ジェイガンが「優越の文化」(culture of superiority)と呼んだ(筆者とのインタビュー)ステレオタイプのフォークロアを発達させることで、インド系人たちが民族差別的状況に積極的に対抗しようとしてきたことを理解すべきである。つまり、ジェイガンによると、インド系人たちが用

いる民族的なステレオタイプは国家の政治経済システムにおける自分たちの民族的な劣勢を解消するためのものであることを示そうとしたのである。彼はそうしたステレオタイプの使用を「優越の文化」と呼んだ。

60年代以降の民族紛争ないしは民族差別が原因で既得のニッチへのアクセス権を奪われた時、人々は自らの生活を保証する新たなニッチ探しに着手した。それは個人によって国外への逃避であったり、PNC政権との屈辱的な和睦、あるいは隣国スリナムへの密輸業者化などであった。また、カリ・マイ信仰など宗教的な帰依によって精神的救済の中にそれを求める方法もあったはずである。しかし、それらは彼らが置かれた社会環境の基本的な構造を変革するものではない。だが、ジェイガンの言うように、ステレオタイプが民族的優位性の表現であったとするならば、インド系人は少なくとも心理的な面において救済されることになる。しかもそれだけでなく、ステレオタイプという住み分けを正当化する論理すなわち他者を排除する原理を手に入れることによって、インド系人は社会生活においてアフリカ系人たちと対等なレベルで交渉する手段を手に入れたのだと言えよう。

## 5. おわりに

住み分けと言っても、インド系人とアフリカ系人が完全に分離して別個の社会組織を形成しているわけではない。両者は一つの政治・経済・社会制度を共有しながら、個人の生活のある領域において他方の民族との接触を避けているに過ぎない。それを我々は果たして「住み分け」と呼んでしまってよいのだろうか。ここで仮に、住み分けによって安全な生活のための領域が各々の民族に確保されていると想定してみよう。それは確かに他民族からの攻撃に対する防壁の役目を果たすだろう。あるいは、職や社会的保護を失った（得られない）人々に対してそれに代わり得るなんらかの代替物を与えてくれるだろう。だが、そういった保障をそれぞれの民族集団に属する人々全員が一様に必要としているわけではない。特に、人種の民族的な違いによる差別待遇を相殺してくれるような個人的ネットワークが他民族集団の人々との間に築かれている場合には、そういった民族的エンクレーブが提供するサポート機構に頼る必要は全くない。実際に、60年代の紛争においてもそういった形で異民族集団の中に留った人々も少なからずいた。また、他民族集団の人々との接触が頻繁に要求されるような（あるいはそれが避けられないような）職業においては、民族の差異化はむしろ障害とさえなるであろう。つまり、個人の社会生活の実現あるいは利益

の最大化という点からすれば、民族的なエンクレーブへの逃避は一つの選択肢でしかないのである。すなわち、民族的なエンクレーブに留ることも、また新たにそこに算入することも、たとえばインド系人エリートたちの一部が取ったPNC政権への迎合主義と同様に、個人としてのインド系人が生きていくための一つの戦略の選択なのである。

しかしここで我々が注目すべき点は、ただ単にこの住み分け戦略がどれだけ行なわれているのか、もしくはその必要性がどれだけあるのかではなく、むしろそういった住み分け戦略を人々がどういった基準で選択しているのか、またその選択をする場合の理由づけは何なのかである。なぜならば、住み分け戦略は個人が取り得る一つのオプションであるとは言っても、それは決して「国民の義務の行使」から自由ではあり得ないからである(Despres 1975:128)。その戦略の必要性(権利)と国民としての義務との葛藤の中にこそ、あるいはその葛藤の中で揺れ動く個人の意識を明らかにしてこそ、ガイアナ国民としての民族意識、さらにはその国民意識と民族意識のバランスの上に展開されるステレオタイプの使用を明らかにすることができるのだと言えよう。すなわち、エスニックな戦略はガイアナ国民という自己実現のあり方を常に参照した上での行動でなければ意味がない。

しかしながら、ウィリアムズが述べているように(Williams 1991:255)、この民族指向的な自己実現の方法と、ガイアナ国民としての身分が要求する自己実現の方法との間での葛藤を引き起こしている原因であるように見える民族的アイデンティティあるいはエスニシティ自体が、実は多分に政治的な偏向によって支えられたものであることに十分注意する必要がある。ガイアナ人が民族的なものを説明したり、ガイアナ人やその行為を民族的に分類する際に用いる基準は主観的に決定されるものであるばかりか、それはかなりステレオタイプ化されたものなのである(Despres 1975:128-129)。民族の住み分け現象にしても、それは決して絶対的なものなどではなく、傾向として観察される相対的なものに過ぎない。ましてや、ガイアナの人々がこの「住み分け」に関して言及する時には、ガイアナの民族関係一般に関する彼らなりの解釈を加えようとしているのであり、その場合「住み分け」は事実というよりはイメージ化された言説というべきものである。

だとするならば、次のような解釈が可能である。インド系人およびアフリカ系人たちは、必要に迫られて住み分けを行なっているというよりは、伝統的な生活様式として定着してしまった住み分けに対して敢えて変革を求めようとは

していないだけなのだ。確かに、インド系人にしろアフリカ系人にしろお互いに交じりあい、競合しあうことに対して不安と拒否的感情を持っていることは事実だろう。しかしだからと言って、両者が必要性から住み分けているということにはならない。むしろ、彼らは「住み分け」言説が可視化する民族対立の危険性を理由にして、住み分けを続けているのである。インド系人とアフリカ系人はさまざまな点で相容れないから住み分けをしているのではなく、混住する努力を怠っているから相容れないだけなのである。彼らはそういった努力をする代わりに、住み分けを正当化するためのさまざまなステレオタイプを練り上げてきたのだと言っても過言ではないであろう。

本来、今日を生きる人々にとって、またかつての住み分けのプロセスを知らない人々にとって、住み分けはどのような具体的な意味があるのだろうか。もちろん、民族関係は常に累積的なものであり、現在の民族関係のありかたはその過去から決して自由ではなく、必ずそのどこかに過去の経験を継承もしくは内包している。すなわち、一人の個人が自らの置かれた民族関係の歴史的過去についてなんら知らなくとも、その人を取り巻く民族関係がその人を歴史的な限定物として扱ってしまうという側面がある。だが、すべての人がそういった状況に拘束されるわけではない。むしろ、人々はある種の判断ないしは決断の下にその歴史的拘束性引き継いで行くか、あるいはそれを拒否するかするはずである。だとすれば、住み分けに関する言説および行動は、特に今日それを実行している、あるいはそれについて言及する人々にとって、社会的な事実である以上に、なにがしかの意思表示を行なうための一つの戦略と見るべきである。しかも、ステレオタイプ化された民族観は住み分けの理由を説明するための単なる論理ではなく、むしろ住み分けという民族的な関係性を正当化するための一つの政治的な原理として用いられている。それは国家レベルにおける公正な政治的競争が抑圧されるような社会システムの下で発達してきた民衆的な政治的表現の一つと見るべきであろう。

生態学的な観点からすれば、住み分けは閉じられたシステムにおいて複数の集団が衝突を回避することによって共存を図るためのメカニズムとなる。また、社会学的な視点に立つならば、それは個人レベルにおける社会関係に制限を加える制度である。しかし、実生活においてアフリカ系人とインド系人との接触を制限することは実質上不可能であるばかりか非現実的である。ところが、ステレオタイプはフォーマルなレベルにおいて相互の関係に規制を加えることなく、社会関係を構造化することが可能である。それゆえに、ステレオタイプは

ガイアナ社会に発達し得たのだといえよう。その場合、民族的なステレオタイプは逆説的ではあるが、自民族中心主義の一形態であるというよりは、むしろ民族間の関係性を規定しようとするものであるという点においてコスモポリタンな政治表現なのだとは言えないだろうか。

## 注

- [1] ガイアナでは民族的な分類を行なう際、一般には民族ではなく人種という用語が用いられてきた。この社会的な言説としての人種概念は、プランテーション・オーナーとしての西洋人とプランテーション労働者としての非西洋人との社会的区分を身体レベルにおいて表現しようとしたものである。しかし、実際には身体的特徴は必ずしも有効な指標とはなりえないのが現実である。実際、奴隷解放後のプランテーション労働者にはまずポルトガル人が導入されているが、身体的な特徴においてイギリス人と決定的に異なるとは言えないこのポルトガル人を異なる人種とするために、言語や習慣などの文化的要素が指標として用いられた。本稿において後述するように、ガイアナにおける人種をめぐる社会的な言説は明らかに身体的な特徴よりも文化的な差異に基づいている。
- [2] ただ、現実にはインド系人集落の多くが幹線道路から外れていることが多いため、幹線道路を通過するだけではこの民族の集住化傾向はわからない。それを知るためには各集落の中にもまで入っていく必要がある。
- [3] なお、都市部にはアフリカ系人の他に、白人はもとより混血、ポルトガル系人および中国系人の多くも居住している。ポルトガル系人に至っては約68.5%(5902人)が都市部に住み、しかもその96%は首都ジョージタウンに集中している。プランテーションに居住するポルトガル系人は全ポルトガル系人のわずかに4%(318人)に過ぎない。また、プランテーションにとどまっている中国系人も全体の16%(473人)だけである。
- [4] 40年の間に人口構成が変化した可能性は否定できない。しかし、1960年の統計は民族紛争以前の状態を示すものであり、住み分けの度合いが1921年の統計よりも一層明確に表われているという事実は、民族的な共存が進んでいたというワイン・パリー紛争調査団のレポートと矛盾する(Hubbard 1969:24への引用)。そのレポートが事実だとすれば、両者の統計における差は統計の取り方における単位の問題が反映しているとみなした方が妥当である。
- [5] ただし、それは必ずしも各民族が最適のニッチに適応したことを意味しない。むしろ、当時彼らに許された範囲内において達成可能な最適地であった点に注意すべきである(cf. Jagan 1966:296)。また、デスプレスの言う差別的適応は各民族が最大限利害の対立を回避している状態において成立するものであり、一旦、経済的資源の配分をめぐる争いが生じるとそれは民族的な対立へと発展して行かざるを得ない実践的な問題を含んでいた(cf. Jagan 1966:292)。
- [6] その他、概してポルトガル系人、中国系人、混血、アフリカ系人は商業や工業、行

- 政など権力ハイアラーキーの高位の職業を占める傾向があったことが1931年の統計から伺える(cf. Despres 1969:30; Baksh 1979)。特に、ポルトガル系人と中国系人は商業部門で大きな影響力を持ち、また混血の人々は知的職業や行政部門に従事するものが多かった(Despres 1964:1056)。
- [7] この場合、プランテーション・オーナーおよび植民地当局がプランテーション労働力を安全に確保するために、社会制度の整備やイデオロギー操作において民族間の利害の不一致や文化的な差異を利用かつ増幅させていた歴史的背景を差し引いて理解しておく必要があるだろう(cf. Moore 1987:180,184)。
- [8] 1960年代の民族紛争以前には民族間に際立った反目はなく、むしろ人々は平和裡に共存していたという証言を今日でも数多く聞くことができる(Williams 1991:46)。
- [9] インド系人同志の間では、「自分の民族」を意味する「アパンジャー」(“Apan Jhaat”)が選挙キャンペーンのスローガンとして用いられた。
- [10] インド系人の移動はPPP党员によって組織的に行なわれたケースもあった(cf. Glasgow 1970:129)。
- [11] 筆者がこの村を訪れた時、バクストン側の水路に面した1本の道路は木によって塞がれていた。これはその通りに宝石店が1軒あり、最近強盗に狙われたばかりであるため、防犯的な意味合いから塞いであるのだという説明を村人から聞いた。そこを塞ぐことによって、その通りへの出入り口は実質上幹線道路につながる1本の道しかなくなるため、防犯効果はより高まると言うのである。ところが、この説明を行なった宝石店主はこうしたことをしても実は気休めにしかならないのだと付け加えた。最近の強盗には村の内部に手引きをするものがいるため、村の防犯的な構造も実はあまり役に立たないのだと言う。
- [12] アフリカ系人側に一脈通じたインド系人は、インド系人たちの間での地位ないしは信頼を失うのではないかと思われるが、この点に関してインド系のあるインフォーマントは次のように答えた。「少なくとも彼らはインド系人であることに変わりはない。しかし、今はたまたまアフリカ系人の政府に付いた方が都合がいいからそうしているだけだ。結局、それが彼らのビジネスなんだから仕方ないさ。」
- [13] エリート階級の人々がベル・エア・ガーデン地区に居住することに関しての意識調査は実施していない。ここで提示された解釈は、筆者の推論によるものである。しかし、ベル・エア・ガーデン地区以外に住むインド系人も筆者と同じ状況にある。つまり、インド系人居住区としてのベル・エア・ガーデン地区はインド系人の想像力に依存する点が大いことを考えれば、ここでは、ベル・エア・ガーデン地区がインド系人の居住区になった事実としての理由を説明することは重要ではない。
- [14] ガイアナ大学の社会病理学研究機関はインド系人居住区とアフリカ系人居住区との比較社会的な研究から、犯罪の発生率においてアフリカ系人地区の方が相対的に高いことを明らかにしている(Social Pathology Research Unit 1975)。
- [15] このインド系人市が今でも続けられているのは、単にインド系人がアフリカ系人地区の市場へ買物に行くのを避けているためだけではない。インド系人を顧客として始まった市場が商業的な成功を納めたためでもある。今日、アフリカ系人たちが

経営するトライアンプの公設市場は品数および規模の点においてこのモン・リポールの週末市場に明らかに劣っており、インド系人だけでなくアフリカ系人もインド系人市に買物に行くようになっているのである。

[16] すでに述べたように、1960年代の民族紛争時に鉱山都市マッケンジー・ウィズマー（現在のリンデン）で起きたアフリカ系人によるインド系人の虐殺事件は克服しがたい身体的な差を象徴するものとしてインド系人の記憶に深く刻まれている。

## 付記

本稿は文部省科学研究費国際学術研究（研究課題「アジア系ラテンアメリカ人の民族性と国民統一民族集団間の協調と相克に関する研究」）の調査研究助成によって1992年の8月から9月にかけて行なった現地調査に基づいている。ガイアナではその後の選挙によってPPPが政権の座につくなど、政治的環境に多少の変化が生じている。この政治的な状況の変化によってインド系人の民族的言説が幾分かは変化しているかもしれないが、この点に関しては現時点ではフォローできていない。その意味では、本稿の議論は1992年の時点までを扱った歴史的考察である。しかし、PPPが政権を取ったからと言って、インド系人とアフリカ系人との対立的な関係が解消したわけでも根本的に変化したわけでもない。むしろ、PPPが政権を取ったことで、インド系人はトライアンプ村のあるインド系人の場合のように、アフリカ系人による報復を心配しなければならない状況に置かれたわけで、そうした危惧が解消されない限り、本稿に述べたインド系人の社会的認識に基本的な変化はないはずである。

## 人口統計資料

*Report on the Results of the Census of the Population 1931.* C.H.Norton (Census Commissioner's Office, British Guiana). 1932.

*West Indian Census 1946. Part D. Census of the Colony of British Guiana, 9th April, 1946.* Kingston. 1949.

*Population Census 1960. Vol.II. Part A. Port of Spain: The Population Census Division of the Central Statistical Office.* 1964.

*1970 Population Census of the Commonwealth Caribbean. Vol.7 Race and Religion.* Kingston: The herald Limited, Census Research Programme, University of the West Indies. 1976.

*Guyana International Migrant Report 1969-71,1972-74.* Georgetown: Statistical Bureau, Ministry of Economic Development.

*1980-1981 Population Census of the Commonwealth Caribbean. Guyana. Vol.2.* Statistical Institute of Jamaica. 1985.

## 参考文献

- Baksh, Ahamad. 1979. The Educational and Occupational Mobility Patterns of the East Indians in Guyana. A paper read at East Indians in the Caribbean: A Symposium on Contemporary Economic and Political Issues.
- Bartels, Dennis. 1974. The Influence of Folk Models upon Historical Analysis: A Case Study from Guyana. *Western Canadian Journal of Anthropology* 4(1):73-81.
- Bartels, Dennis. 1977. Class Conflict and Racist Ideology in the Formation of Modern Guyanese Society. *Review of Canadian Sociology and Anthropology* 14(4):396-405.
- Despres, Leo A. 1964. The Implications of Nationalist Politics in British Guyana for the Development of Cultural Theory. *American Anthropologist* 66:1051-1077.
- Despres, Leo A. 1969. Differential Adaptation and Micro-cultural Evolution in Guyana. *Southwestern Journal of Anthropology* 25:14-44.
- Despres, Leo A. 1975a. Ethnicity and Ethnic Group Relations in Guyana. In J.W.Bennett(ed.) *The New Ethnicity: Perspectives from Ethnology*. pp.127-147. St.Paul: West Publishing Co.
- Despres, Leo A.(ed.). 1975b. *Ethnicity and Resource Competition in Plural Societies*. The Hague: Mouton
- Ehrlich, Allan S. 1971. History, Ecology and Demography in the British Caribbean: An Analysis of East Indian Ethnicity. *Southeastern Journal of Anthropology* 27(2):166-180.
- Glasgow, Roy A. 1970. *Guyana: Race and Politics among Africans and East Indians*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Green, J.E. 1974. *Race vs. Politics in Guyana*. Mona: University of the West Indies.
- Hintzen, Percy C. 1989. *The Costs of Regime Survival: Racial Mobilization, Elite Domination and Control of the State in Guyana and Trinidad*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hubbard, H.J.M. 1969. *Race and Guyana: The Anatomy of a Colonial Enterprise*. Georgetown.
- Jagan, Cheddi. 1980 [1967]. *The West on Trial: The Fight for Guyana's Freedom*. Berlin: Seven Seas Publishers Berlin.
- Jayawardena, Chandra. 1980. Culture and Ethnicity in Guyana and Fiji. *Man (n.s.)* 15:430-50.
- 前山隆 1994. 「ポスト植民地主義と文化人類学」『社会人類学年報』20:1-25.
- Mars, P. 1987. The Significance of the 1962-1964 Disturbance. Unpublished

Manuscript.

- Moore, Brian L. 1987. *Race, Power and Social Segmentation in Colonial Society: Guyana After Slavery, 1838-1891*. New York: Gordon and Breach Science Publishers.
- Newman, Peter. 1964. *British Guiana: Problems of Cohesion in an Immigrant Society*. London: Oxford University Press.
- Patterson, Orlando. 1957. Context and Choice in Ethnic Allegiance: A Theoretical Framework and Caribbean Case Study. In Nathan Glazer and Daniel P. Moynihan (eds.). *Ethnicity: Theory and Experience*. Cambridge: Harvard University Press.
- Roback, Judith. 1968. Bases of social Differentiation in a Guyana Mining Town. M.A.Thesis (McGill University, Montreal)
- 柴田佳子 1993. 「『避けられればそれにこしたことはない』インド系と黒人系間の交婚について—ガイアナの事例を中心としたスケッチ」前山隆編『アジア系ラテンアメリカ人の民族性と国民統一民族集団間の協調と相克に関する研究』65-77頁、静岡大学人文学部文化人類学教室.
- Silverman, Marilyn. 1979. Dependency, Mediation, and Class Formation in Rural Guyana. *American Ethnologist* 6(3):466-490.
- Smith, M.G. 1960. Social and Cultural Pluralism. Social and Cultural Pluralism in the Caribbean. *Annals of the New York Academy of Sciences* 83: 763-777.
- Smith, Raymond T. 1962. *British Guiana*. London: Oxford University Press.
- Socail Pathology Research Unit. 1975. Crime in Guyana. Georgetown: University of Guyana. Mimeographed Paper.
- Williams, Brackette F. 1991. *Stains on My Name, War in My Veins: Guyana and the Politics of Cultural Struggle*. Durham: Duke University Press.